

## ㄐ' Q' ㄐ kaomoji : zou

杉本裕一

さてさて白い象を探す旅に出るために、僕はなによりもまず音楽をかけました。斉藤和義「Theme of ELEPHANT MOON」。C.C.King「Elephant March」。ただの象つながりです。のしのし。

実のところ僕も、白い象を求めては路頭に迷っておりました。いかんせん出不精なもので、旅に出る前にとりあえず何かしら引用できないかと思ひ立ち、ビデオ屋でそれらしい映画やドキュメンタリーを探しても見当たらず、図書館にもそれらしい本はなさそう。もう覚悟を決めてどこぞに飛び立ったほうがいいのか……でももう期限まで時間がない……動物園に行く暇も……待てよ。そもそもいるかどうか怪しい生物を探すことが愚かなんじゃ？龍とかネッシーみたいに、「いないことを証明するほうが簡単」そんな場合だってあるはずだ。まずいるのかどうかを調べてみようじゃないですか。

いない生物なら、インターネットで検索してみても「存在は明らかでない」とかそういう記述が出てきたり、そもそも検索結果が出ないことだろう。なんだ、考え方によっては5秒で終わるレポートじゃないですか。意気揚々と『白い象』と打ってエンターキーを押してみた。……出ました！約2,660,000件。こりゃいるね。確実にいる。そりゃそうだ、小説になってるぐらいだもんね。

仕方なくその検索結果から白い象の存在を確認することにした。検索結果第一号にあった白い象の定義とは、こうである。「東南アジアで神聖視される白いゾウ」。なるほど。確かに白には神聖さや、正義とか、そういったことを連想させるイメージがある。逆に黒い象はすごく不気味だろうし、灰色の象は見てもなんとも思わないだろう。いやだって象自体そんな色なんだから。

冗談はさておき、にわかにはそんな象がいるとは信じがたい。だって見たことないんだもの。そもそも、一般的に白くない動物に白い個体が現れるケースは2つある。1つは、「白変種」と呼ばれる色素のない個体がいることである。ホワイトタイガーやシロクマがその例で、生物が長い時間をかけて進化を遂げる中で、氷河期という避けて通れない環境を乗り越えるために、保護色として白い色を採用し、それを遺伝子の情報に乗せて引き継がせる動物がいくつかいた。そのために現在でも絶対数は少ないものの、「白い体毛や皮膚の遺伝子を持つ動物」の種類自体は、多くの脊椎動物において確認されている。

2つめは「アルビノ」と呼ばれる、こちらは遺伝子性で先天的な病気をもつ動物が何体かいることによる。白変種とアルビノはしばしば混同されるが、遺伝子の正常性という点で全く異なる。……とはいえ、真っ白な動物がそういう科学的な根拠の上に存在すると言われてしまった以上、象にも存在すると言っていいんでしょう。諦めさせてくれないなあ。

じゃあ試しに「白い動物」とでも打って画像検索してみますか。

でるねえ。

このように様々な動物が出てくるわけですが、10 ページぐらいまで画像を追いかけたところに出てきた動物は以下のとおり。

- ・ライオン
- ・フクロウ
- ・リス
- ・オコジョ（もともと白い）
- ・ゴリラ
- ・クジャク
- ・ヘビ
- ・トラ（ホワイトタイガー）
- ・シロクマ
- ・アルパカ
- ・シマウマ
- ・ワニ

象はいてないんかよ、と憤っても仕方ない。こういう時、いろいろなキーワードを挟めばそれに対応してくれるのがこの情報化社会です。

じゃあ次は、「アルビノ」と入れてみよう。

むむむ？象はでてきてないやん。終わったな。そういうことで、私は最後のキーワードに一縷の望みを託しました。

ハイハイ白い白い。象はいないね。象は……んんん？

ゾウらしい画像が一枚だけありましたね。

これ。

この画像を載せているサイト（1）によれば、これはアフリカ大陸の中部、サンブル国立保護区というサファリゾーンの風景らしい。どうもこれを見ていると白というよりは「限りなく白に近いグレー」みたいな色をしているけれども？

そのページに詳しい記述があった。この保護区の地面はチョークと呼ばれる白い土で覆われており、どうもそれを虫除け用に体に振りかけているらしいとのこと。アフリカにも幸福は訪れたのかと思った。でもたしかに子どもの象は真っ白になってますね。へー。

さて、インターネットの海をさまようことで白いゾウにようやくめぐりあえたわけですが……それだとあんまりおもしろくないですね。最後に白象に関する逸話でも紹介してお開きにします。

仏教の始祖ゴータマ・シッダールタの母マーヤーが、体内に白い象が入り込んでくるという夢を見てから生まれたのがシッダールタである。というのは以前のレポートでも書いたけれども、このことから仏教国、とくにタイでは伝統的に、白い象に関する信仰が深いのです。歴史上でいえばアユタヤ王朝が存在したとき、チャックパラットという王は白象を収集して白象王と呼ばれたり、現代のタイ国王も上野動物園にゾウを贈呈するぐらいの象マニア。20世紀初頭までのタイの国旗には白い象そのものがどどんと書いてあったり。特に興味深いのが、ヒンドゥー教には象学という象に関する学問が存在し、それによって象を品評したりするそう。タイには象に関する法律まであり、それによれば白い象は国王に進呈されるべきであり、捕まえて献上した者は国王との謁見、多額の報償と名誉が与えられるとか。ということは、さっきのアフリカの象をタイの国王に献上すれば大金持ち！？じゃあこんな調査しなくても……いえ、地道に働きます。こんなもんで終わります。

参考：[http://4travel.jp/overseas/area/africa/kenya/samburu\\_national\\_reserve/travelogue/10146646/](http://4travel.jp/overseas/area/africa/kenya/samburu_national_reserve/travelogue/10146646/)

# 白い象

宮本悠希

白い象とは、英語で「やっかい者」という意味である。由来は定かではないが、かつてシャム（現タイ）の王は破滅させたい家臣に白い象を送ったという。白い象はめったに存在せず、神の使いとして神聖化されており、殺すに殺せない。さらに王からの贈り物でもある。また、育てると餌や世話に膨大なコストがかかり家臣は困り果ててしまう。というところからきているらしい。確かに（やっかい者）だ。

さらに、「白い象」と調べてみるとある記事が出てきた。

やっかいな「白い象」になる原発

「殺せない」しかし「誰も世話できない」

※写真は yahoo! 検索（画像）で  
「白い象」と検索したもの

という見出しの記事だ。まさに上で述べたようにやっかい者の原発のことを指している。絶妙な例え方で、意味を理解している私にとっておもしろく感じた。意外と日本でも「white elephant」を認知している人がいるんだなとも感じた。

そして私が現在調べている「white elephant」と、近年問題となっている「原発」というタイムリーな組み合わせも相まって非常に興味深かった。

単に「elephant」と辞書で調べてみると、

elephant in the room わざと避けられている主問題

例) Let me point out the elephant in the room.

みんなが触れたがらない問題を指摘させてくれ

とある。完全に邪魔者扱いされている。「white elephant」でも「elephant」だけでもやっかい者なのだ。動物園で大人気の elephant も、識者の脳内のどこかには「やっかい者」としての elephant が刻み込まれている。

もしかしたら実は、「white elephant」にとっては私たち人間が最も「white elephant」なのかもしれない。

# 「白い象のような山並」“HILLS LIKE WHITE ELEPHANTS” の女の心境の変化を読み解く

大学院 英語教育専攻  
武部 俊輔

## 序

アーネスト・ヘミングウェイは20世紀の文学界に多大な影響を与えた小説家の一人である。彼の作品のうち代表的で高い評価を受けているものには「清潔な明るい店」「殺し屋」などがあるが、1927年に出版された短篇集『男だけの世界』に収められている「白い象のような山並」(“Hills Like White Elephants”)もヘミングウェイの素晴らしい短篇の一つではないだろうか。この物語においてもヘミングウェイならではの短く、簡潔な客観的描写が用いられており、男女の「妊娠中絶」に対する考え方の違いが生み出す葛藤の緊迫感が繊細に描かれている。まずはこの「白い象のような山並」の概要を紹介し、次に女の心境の変化を読み解いていきたい。

## 「白い象のような山並」の概要

この「白い象のような山並」の物語は、スペインの峡谷の駅で、焼けつくように暑い夏に、アメリカ人の男とその連れの子により、マドリッドへ向かう列車の待ち時間である40分間に繰り広げられるつかの間の出来事を描いている。二人はその駅のバーでビールを飲みながら列車を待つのだが、女がそこから見える山並を白い象のようだと言い、その後二人の間に言い争いが始まる。「白い象」という言葉には「始末に困る物」「厄介物」という意味があり、そこから読者は二人の間になにか厄介な物があることに気付かされる(橋本 1995)。二人は気分を変えようと「アニス・デル・トロ」という酒を頼むが、女が「リカリスのような味がするわね。あなたが長く待ち望んできたものは特にそうね」と言い出し、また二人の間に口論が始まる。読者には一体何を言おうとしているのか分からないかもしれないが、男が「ほんとに、とても簡単な手術なんだよ、ジグ。ちょっと空気を入れるだけなんだよ」と言い出し、読者に妊娠中絶というトピックが思い浮かぶ。ここから男は女の自主的な墮胎を決心するように巧みに勧めるが、女は自分の体を気遣ってくれない男に苛立ちを覚える。また痴話喧嘩が始まるが、女の「いいかげんにしないと、大声出すわよ」の一言で終止符を打つ。酒場の女がビールを持ってきて時間を知らせたとき、女は明るい微笑みを見せる。また反対のプラットフォームまでバッグを運ぶ男に「もどってきたら、このビールを飲んでしましましょうよ」と微笑み、戻ってきた男に「いい気分よ」とまた微笑みかける。

## 少女の決断を「出産」として読み取る

この「白い象のような山並」の大きな謎は、女が最後に見せる女の微笑みの意味をどのように読み解くかである。少女の微笑みから彼女の中に一つの決心が着いたことを悟ることができるが、それは未だ断ち切れぬ男への未練から来る「妊娠中絶」という決断か、それとも「出産」という決意か。多くの読者は男への未練から来る「妊娠中絶」を決心したと考えているが、私は「出産」する決意だったと考えている。ヘミングウェイの多くの短篇小説では、登場人物の心理描写が微妙な行動や動作として表される(木村 1992)。女の会話だけでなく、情景描写や彼女の仕草や行動から彼女の決意が読み取れることを論じてみたい。

女の心境を読み取るために、まずはこの二人のやりとりが起きた場所について注目しておく必要がある。この小説の設定はスペインの乗換駅であるが、その駅は上りと下り二本の路線の間にある。これから起こる二人の「中絶」をめぐる言い争いは、この二本の平行線の路線のように決して解決することがないことを比喻している。上りと下りの線路はそれぞれ「中絶」と「出産」を表しており、二人がどちらかを選ばなければならないという人生の岐路に立たされていることを示しているのではないだろうか。山並のある側（“this side”で表現されており、これは男側の中絶を意味している）には乾ききっている不毛の景色があり、もう一方（“the other side”で表現されており、これは女側の出産を意味している）には穀物畑や木々がエブロー川の川岸に広がっている。

女の気持ちはこの小説の中で大きく変化していく。最初に登場したときの女は、恋人のアメリカ人の男に言われるがままに行動するような女であり、力関係も男が握っているようであった。それは、男がスペイン語を使い、酒の知識にも精通しており、二人の鞆を彼が持っており、旅の主導権を持っていたことから考えられる (Benner, 1995)。この男と女の力関係は女の “What should we drink?” に対して答えていなかったり、“I might have. Just because you say I wouldn’ t have doesn’ t prove anything.” というやりとりにも表れている。ここで女は突然外の景色を “They look like white elephants.” と言う。この「白い象」は前述した通り彼女のお腹の中にある命が「厄介物」であることを指すが、おそらくこのときは彼女もそう思っていたと考えられ、その意識から「白い象」という言葉が出てしまったのではないだろうか。なぜならこのときの女は、男の思うがままに動いてしまう自己をもっていない存在であったからである。

しかし、この女は男との話のやりとりのなかで “Everything tastes of licorice. Especially all the things you’ ve waited so long for, like absinthe.” というように男に対して皮肉めいた攻撃をし始める。もう一度山並を見たとき、今度は、「白い象」のようではないと言い出す。これは彼女の中でなんらかの気持ちの変化、もしくは迷いがあると読み取ることができる。実際、男が執拗に「中絶」を求めるシーンでは、今まで男のいいなりに動いてきた女が自分の意思を示し始める。この場面には女の大きな心境の変化が表れている。男の「中絶」を求める発言に対し、女は “Then, I’ ll do it. Because I don’ t care about me.” と返す。これは自分のことしか考えていない傲慢な男の態度に対し、女ができる精一杯の皮肉であったと考えられる。またそのあと男の “I don’ t want you to do it if you feel that way.” に対して、女は立ち上がり、駅の端へと向かって行く。この場面では女が初めて男の介入を受けたくない気持ちから、物理的に距離を取ったと考えられる (Benner, 1995)。この動きは男のコントロールから解放され、自分の気持ちを整理するために彼女が必要とした行動だったのであろう。また、そこに見える情景は “the other side” であり、そこには「生命」「出産」を意味する穀物畑や川が広がっていた。これには男のコントロールから一時的に解放された女の「出産」への気持ちの高まりを表していると考えられる。男は “Come on back in the shade.” と言い、もう一度彼女をコントロールしようと自分の元へ帰らせるが、肉体的には彼の元に戻っても、気持ちは彼から離れたままであったと考えられる。

彼女の気持ちはまだ “the other side” にあるのに “this side” に戻ってきていると男は思い、説得を再度試みるが、二人の気持ちは駅を挟む二本の路線のように交わることは決してない。この後のやりとりは代名詞 “it” を用いて「中絶」「出産」「女が子どもを産むこと」など様々な意味を持ちつつ見事に繰り返される。ただここでも女の体のことや子供のことを心底気遣うことのない男の自己中心的な態度に、いよいよ女は苛立ちを抑え切れなくなる。7回言った “please” には絶対に「中絶」することはできない彼女の強い気持ちが表れており、「もはや男の身勝手な頼みを聞くつもりはない」とはっきり拒絶しているように読み取ることができる。

店員と男に見せた女の最後の微笑みにはどのような意味があったのだろうか。彼女は男との口論の末 “I’ ll scream.” と言った後、あと5分で列車が来ると教えてくれた店員に明るく微笑みかける。ここで多くの読者は彼女が男の傲慢な態度を知りながらもこの男のことを愛しており、「中絶」を決意したと読み取っている。はたして本当にそうであろうか。もしも、彼女が「中絶」することを意味するマドリッド行きの列車に乗ることを決心していたとしたら、本当に「明るく」微笑みかけるだろうか。おそらく “smile bitterly” や “smile ironically” と表現されていたであろう (Benner, 1995)。この “smile brightly” には彼女の中で一つ大きな悩みが吹っ切れたことから出た表現かもしれない。つまり、彼女はもはや「中絶」するためのマドリッド行きの列車に乗るという選択をするつもりはないのではないだろうか。さらに男の “I’ d better take the bags over the other side of the station.” という発言を聞いた後も、彼に微笑む。これには男が鞆を持っていくために自分の前から離れ、口論する必要がなくなり、叫ぶ必要がなかったからであると考えることができる。決して男に対する愛情が戻り、「中絶」を受け入れたからではない。そのためここでは “smile brightly” とは書かれておらず、ただ微笑んだと書かれている。

最後に男が鞆を持って行き、バー再びに戻ってきた時、彼は “Do you feel better?” と女に尋ねる。女は “I feel fine. There’ s nothing wrong with me.” と答える。ここでは彼女のどのような気持ちがこの言葉に表れているのであろうか。これも読み方によっては “There was something wrong with me. I am sorry.” のように考えることができ、傲慢なことは分かっている、この男のために自己犠牲を選んでいるかのように読むこともできる。しかし、やはり今までの彼女の自我の目覚めからやはりこのようなことは考えにくい。これは “There is nothing wrong with me, but there is something wrong with you.” とほのめかしているように読むことができる。つまり、女はこの傲慢で自分のことをまったく心配してくれない男にもはや愛想が尽きており、この男を捨て、新たな人生をスタートすること決心したと考えることができるのである。こちらの考えの方が、彼女の今までの行動や仕草を考えるとしっくりくるのではないだろうか。

#### 最後に

このヘミングウェイの「白い象のような山並」はほんの7ページから成る短篇小説である。テーマとなる「中絶」が “abortion” のようなストレートな表現をされていないように、多くの情報ができる限りそぎ落とされ、内容の理解の多くを読者にゆだねるかのように簡潔に、また客観的に描かれている。しかし、物語を読み解くカギは随所に散りばめられており、その一つ一つに注意して読むことより、一層この作品を深く味わえるであろう。今回私は「中絶」はしないのではないかと読み取った(少なくともこの女と男との愛が戻ることはないと考えている)が、これは今もまだ謎のままであり、読者がどのように読み解くかは自由である。本稿を読んで「白い象のような山並」により興味を持ってもらえれば幸いと思う。

#### 参考文献

橋本賢二『アメリカ短篇小説の伝統と繁栄』大阪教育図書, 1995. pp.79-88.

木村達雄『ヘミングウェイ短篇手法』英宝社, 1992. pp.63-75.

Benner. S. Moving to The Girls Side of “HILLS LIKE WHITE ELEPHANTS” *The Hemingway Review*. Vol. 15. 1995.